

## 想像界の生物相 ポリネシアの鳥人

民博 人類文明誌研究部 いんとう みちこ  
印東 道子



資料名 | 倉庫「パータカ」

標本番号 | H0008069

地域 | ニュージーランド

サイズ | 幅 240 cm × 高さ 300cm × 奥行 320cm

### ◆◆南の島々と鳥◆◆

「人間が創る不可思議な生物」をオセアニアの島々で探してもなかなか見あたらない。オセアニアでは芸術性豊かな木彫類が多く作られていたが、表象モチーフは祖先神であることが多く、人間の姿がほとんどであった。そのなかで、鳥の要素が人間と組み合わせられたものが、ポリネシアのハワイやニュージーランド、そしてイースター島に見つかる。いわゆる「鳥人」とよばれるモチーフである。頭が鳥で首から下は人間をあらわした岩絵や木彫がイースター島やニュージーランドで見られる。反対に、頭は人間で首から下は鳥をあらわす木彫もイースター島で作られ、メラネシアのソロモン諸島にも見出される。

オセアニアの島々には哺乳類がほとんどおらず、鳥がもつとも広く見られる生物であったため、この結び付きが生まれたと解釈されている。特にポリネシアでは、鳥は予兆の対象であり、親族トテムや死者の霊、そして神の乗り物として認識されるなど、文化的に重要な存在であった。対象となる鳥の種類は島によって異なり、ソロモン諸島ではグンカンドリ、イースター島ではセグロアジサシ、

ニュージーランドやハワイではフクロウなどが重要で、多様に表象された。

イースター島では、人と鳥の結び付きを象徴的にあらわす鳥人信仰がおこなわれていた。イースター島南端のオロンゴから海を見下ろすと、すぐ沖に小さな島が見える。モツヌイ島である。通常は海上で暮らすマヌ・タラとよばれるセグロアジサシは、七月ごろからこの島に降り立って産卵する。毎年、最初の卵を入手した者の主人がその年の鳥人（タンガタ・マヌ）となり、神聖な儀式をとりおこなう権利や栄誉をはじめ、経済的特権も与えられる。現在でもオロンゴでは、鳥人像が刻まれた岩を多く見ることができ

### ◆◆神と人をつなぐ◆◆

ニュージーランドでは、「鳥人」像が岩絵や魔よけのペンダントなどに見られる一方で、伝統的な集会所「マラエ」内部の柱には、爬虫類的な要素も加わった迫力ある木彫が一面に施されている。マラエに入ってまず目にとまるのは、太い柱に彫刻された祖先像である。アワビを象嵌した丸い目や尖った口から突きだし、舌が特徴的である。その周囲には、マナイアとよばれる精霊が空間を埋めるよ



イースター島の鳥人彫刻(点線で示したのが鳥人)

うに彫刻され、やはりアワビで象嵌された目と尖ったくちばしをもつ。

この独特のマオリ彫刻は、パータカとよばれる貯蔵小屋の外壁や柱にも施され、民博の本館展示でも見ることができ。正面上部の装飾柱は祖先神であるが、周囲の壁にはマナイアや豊穡をもたらすクジラが表現されている。マナイアは祖先神のマナ（超自然力）を人間に伝える役割をもつと考えられており、ポリネシア人が鳥に対してもついていた認識（神と人をつなぐ存在）と相通じるものがあった興味深い。